

### 経営(継業)のツボ

### 理念



### 転期に立つ経営者の資質の鍛え方<sup>58</sup>

## 省察克治<sup>せいさつこくち</sup>

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(簡井書房)、『介護人財創造塾』(簡井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com  
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

#### 心中の賊を破るは難し

介護職の善し悪しは、所属するトップやリーダー自身の人間形成如何にあると、いつて過言ではない。「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し<sup>\*1</sup>」とは、王陽明の言葉である。

人には、「良知<sup>\*2</sup>」の働きを阻む欲望や邪な思いが、どくろを巻いて宿っている。

人が持つ弱さを「人欲」と表した陽明は、これに妥協し、流されてしまうような生き方を克服するには、「省察克治」の修養がいると「伝習録」で説いた。

「省察」は、安きに流れる自分自身を省みて考えめぐらすこと。

「克治」は、そのような考えを根っこから引き抜いてしまうこと。

自分の弱さの心を心の賊と喻え、社会にとって有用な人をめざしていくためには、人間形成を図るうえからも「立志」「勤学」<sup>3</sup>「改過」「實善」の4つを鍛えなければならぬというのだ。

#### 社会にとって有用な人をめざす

「立志」志を立てること。  
その志とは、目標を設定し、そ

れを実現しようとする意欲のこと。

確固たる目標を設定し、粘り強く実現していくこととする意思がなければ、何事も成し遂げることができない。舵のない舟が水辺の波に漂ってさすらう。漂蕩奔逸<sup>ひょうたうほんいつ</sup>を繰り返しては、いたずらに一生を終えてしまう。醉生夢死<sup>すいせいむし</sup>となってしまう。

「社会にとって有用な人をめざす」と、志を立てることである。

「勤学」学問に勤めること。

その学問とは、単なる知識の修得のことではなく、自分の人格を向上させるのに役立つ学びのこと。

謙虚な態度で自分の無能を自覚し、他人の長所は誉めながらも自分の欠点は大胆に反省するという姿勢があれば、資質は劣つていても、周囲の人から慕われる。

一生懸命に学問を学んだところで、鼻持ちならぬ人とか、鼻っ柱の強い人<sup>4</sup>などと陰口を叩かれるようでは、真に学びを勤めているとはいえない。

「改過」過ちを改めること。

過ちは犯さないにこしたことはないが、誰にでも過ちはつきまとうもの。

過ちを犯さないことではなく、

犯した過ちを改めること、これができるのが賢者である。

過ちと気づいたら、素直に認めて改める態度こそが、人としての進歩や向上にもつながる。

『論語(学而1)』の「過ては則ち改むるに憚ること勿れ<sup>5</sup>」である。

「實善」善を責む。つまり、善を引き受けること。

部下に善くない点があったとしても、思いやりを欠いた叱責や罵倒は慎むべきである。

自分に対しては厳しく、相手には寛容となれるような善を責むには、どのように厳しく批判されようとも、真摯に耳を傾けることのできる心を育むこと。

そのためには、スクスクと伸ばしてしまつた鼻を、自らの手でへし折るくらいの鍛え方がいる。

人づくりの善し悪しの要は、人間力を引き上げることの如何に尽きる<sup>6</sup>といつて過言ではない。

その根本をなおさりにして、枝葉のところだけをいくら手入れしたところで、成果は上がらない。

地に深く誠の心の根をおろす人は根によってのみ開く。不平を言う前に自らを省み感謝の心を持つ<sup>7</sup>……である。

感謝の心を持つ……である。

\*1: 中国・明代の儒学者で、陽明学を興した人物。 \*2: 本誌2010年10月号本欄参照 \*3: 『早川浩士の常在学場』簡井書房、補講「処世訓」から